

〈研究ノート〉

ギデنزにおける自己物語論と「引用」

竹内 秀一

【要旨】

本研究の目的は、「物語」を鍵概念とした文献調査から、今後の自己物語論に資する知見や課題を析出することである。その結果として、次の二つの示唆が導き出された。まずは、「物語」の両義性についてである。すなわち、自己物語を構築するための資源となる物語と、自己を規定する文脈としての物語が認められた。また、いずれも「引用」という営みをきっかけにしていることが明らかとなった。

次には、ギデنزにおける自己物語論の新たな可能性が提示できたことである。彼の議論では自己を編み上げていく連続性や循環性それ自体が問題となる。そのため、自己物語が構築される過程を、より力学的に捉えることができると示唆される。ただし、そのためには実証的な事例研究による知見の積み重ねが欠かせないであろう。

キーワード：自己物語、物語、引用、自己の再帰的プロジェクト

I. はじめに

今日の社会において、自己について語るという営みを様々な場面で目にするようになった。具体的には、入試における面接や就職・転職活動での自己アピールなど公的なものから、SNSのアカウントにみられる自己紹介文など私的なものまで、様々に確認することができる。さらに、その際は学歴や活動歴、適性検査の結果、好きなものや得意なことなど、これまでの生活史ともいえる情報の束が、場面に応じて活用される。つまり、自己分析が自己表現の前提とされる社会になりつつあるということであろう。

このような一連の営為やそこから派生する社会現象について、学術的には「物語」(narrative)という概念を手掛かりに、自己物語論として研究が積み重ねられている。特に1990年代後半以降、物語という言葉は、理論的な意味合いを込めて用いられる傾向にある。この間、「物語」概念は如何に解釈されてきたのだろうか。あるいは、自己との関わりにおいてどのような位置取りをしてきたのであろうか。これらの点が本稿の問題関心である。そこで本研究では、「物語」を鍵概念とした文献調査を通して、今後の自己物語論に資する知見や課題を析出することを目的とする。

Ⅱ. 「大きな物語の失墜」と多元的自己の出現

具体的な検討に入るまえに、自己物語論が頻出することになったひとつの契機について、予め触れておきたい。それが、「大きな物語の失墜」といわれる時代転換の議論である。これはフランスの哲学者である J, F, リオタール（1979＝邦訳 1986）が提唱したもので、「大きな物語」とは人々の営みや思考を方向づける言説や神話といったイデオロギーのことである。マルクス主義やキリスト教的道德観などは、その一例であろう。そこでは、ある価値観が统一的に信じられることで共同体がえられる。もっといえば社会設計がなされることになる。リオタールは、この人々を巻き込む筋書きが機能していた 18 世紀末から 1970 年代までをモダン（＝近代）とし、それが有効性を失った、すなわち失墜した 80 年代後半以降をポストモダンと呼んでいる。

さらに、この議論を引き受けて大塚（1989, 2004）は、「大きな物語の失墜」後において人々を動かしているのは、また別の意味での「物語」だと指摘する。それは、例えば「テロとの戦い」という出来事ひとつを取り上げても窺い知ることができるという。すなわち、自分の側が正義であり悪としての相手を倒す図式が自然と成り立つように、人々はストーリー仕立てで世界を理解しているという示唆である。そして大塚は、「そもそもイスラム圏の人々が何故『テロ』と呼ばれる行動に出てしまわなくてはならなかったのか、そこに至る歴史を顧みて、複雑にからまった問題を話し合っ解決するより、『悪を倒す』という論理で単純に事態を解決しようとしている態度」（2004, p.224）に帰結してしまうことが問題であると続ける。換言すれば、このような説明原理のもとでは—イスラム圏の人々が歴史的な背景を無視して「悪」とみなされたように—個人が「属性」という情報にまで還元され、単純化されてしまうという問題提起である。ここでの「属性」とは、性別や年齢、所属や学歴、容姿、性格、好き嫌いといった一言で表現できる程度の情報群であろう。そのため、そこで認識される自己は歴史的な時間軸と空間との定着によって得られるはずの連続性や安定性を欠いた、フワフワした状況のなかに身を晒されているのである。

だからこそ、前述のとおり人々は自らに（どうしようもなく）紐づく情報に縛られたり、反対に利用できそうな情報を取り入れたりしながら、戦略的に自己表現を果たしているのである。他方で、このような時代転換は自己の複数性や多元性を許すことになる。この点について上野（2005）は、複数のアイデンティティのあいだに強い隔離（compartmentalization）や非関連（dissociation）が成立する状態を、「多重人格」や「解離性人格障害」など病理として捉えることに対して、寧ろポストモダンの個人の通常の在り方ではないかと述べている。あるいは、平野（2012）は「分人」（dividual）という単位を導入して、ほぼ同様の主張を展開する。すなわち、語源として「（もうこれ以上）分けられない」を意味し、その一義的な在り方を示す「個人」（individual）という捉え方では、今日の社会を生きる人々をもはや精確には説明できないのではないかと危惧している¹。これらの内容を踏まえると、多元的自己の出

現は一そこに戦略的な演出や隠蔽などを含むとしても一時代転換が呼び水となった、ある種必然的な個人の在り方と考えられるのである。

それでは、このような多元的自己とその具体的な生存戦略をめぐり、どのような議論が展開されてきたのだろうか。以下より、「物語」概念を補助線にしながらか概観していく。

Ⅲ. 自己を彩る素材としての「物語」

三浦（2005）は、自分で自分の物語を紡ぎ出すような時代を、企業広告やマーケティングが先導してきたと指摘する。いわゆる「自分探し」や「私らしさ」ブームの到来である。三浦によると、モノを選ぶというひとつの行為を取り上げてみても、そこには「消費者自身の自分らしさ志向と企業による自分らしさ訴求との共犯関係」（p.109）があり、物理的なモノの消費を通して自らの「自分らしさ」が立ち上がってくるよう仕掛けられているという。特に「若者は消費を通じてたとえ擬似的にであれ、自己を確認し、自己を表現し、アイデンティティを確立したかのように振る舞うことができたのである」（p.131）と述べている²。このような消費の背景には、さらに次のような示唆が絡んでいると推察される。

前述の大塚（1989）は、自己と消費活動との関連についても論じている。すなわち、「大きな物語の失墜」からくる不安や揺らぎを埋めるべく、人々はメディアを通して流布されるアニメやドラマの物語性—登場人物たちのライフスタイルや価値観など—を断片的に、もっといえば都合よく自らに取り込むようになったという。大塚はこれを「物語消費」と称している。このような様相はドラマなどに留まらず、他のコンテンツでも観察されている。例えば、「スポーツする主体の健康、健全性、規律、鍛錬、克己、英雄的成功などにかんする物語やディスクールは再版され、商品としても消費されている」（内田，1999，p.38）という指摘などが挙げられる。ここに、「物語」が自己表現における素材として、主体的に導入されている様子が認められるのである。

Ⅳ. 自己を規定する文脈としての「物語」

あるいは、自分で自分の物語を指定することについて「キャラ」の議論が挙げられる。浅野（2005）は、若者がしばしば自分たちを指して使う「キャラ」という言葉に注目し、あるキャラがまさに当該キャラとして組み込まれるに相応しい強度をもつ物語が、しかも身をおくコミュニティごとに想定されていると述べる。この点については、土井（2009）に詳しい。多様な価値観や生き方が認められるようになった今日の社会においては、自己の存在感は普遍的な評価の物差しではなく、場面ごとに得られる周囲からの承認に依存するようになったという。そのため、「確固たる拠り所のない存在論的な不安から逃れようとして、付き合う相手をキャラ化して固定し、そして自分自身もキャラ化して固定し、許容しうる人間の幅を極

端に狭く見積もる」(p.62) ようになると述べている。それが具体的なかたちで立ち現れた例が、スクール・カーストである。ここでは、承認を得やすいように「類友」と呼ばれる同質の他者と摩擦の小さい関係が求められ、それ以外は異なる「属性」の人々が住まう離れ小島のように圏外化されていくという。その上で、同質的な対人関係のなかでこそ一お互いの「キャラ」が被らないように一より慎重な戦略が練られていることも指摘している。同様の内容は、「終わりなきキャラ戦争の舞台」(荻上, 2008) や「キャラの生態系」(斎藤, 2014) として、それぞれに考察されている。いずれにせよ、ここでの「物語」には、前述の素材としての物語のような選択可能性は認められない。寧ろ、辻褄が合うような振る舞いを個人に迫り、その一貫性を規定する文脈として、はたらいっている様子が窺えよう。

V. 「物語」の両義性とギデンズにおける自己物語論

ここまで駆け足ではあるが、「物語」概念が如何に解釈され、また自己との関わりのなかでどのような位置を取り得るのか、具体的な事例に焦点をあてた論考をもとに概観してきた。ところで、「物語」に認められた両義性—自己によって主体的に選択される性格と、反対に自己を規定する性格—をどのように捉えればよいだろうか。このとき、A,ギデンズ(1991=邦訳 2005)による自己物語に関する次のような指摘は、示唆的であろう。少し長いが引用したい。すなわち、「ドラマやその他のメディア娯楽は、疑いなく逃避である—それはふつうの社会的条件では得られない現実の満足の代わりにをする。しかしより重要なのは、そのような娯楽が、自己の物語を構築するためのモデルとなるような物語をもたらすということである。…(中略)…肝心なのは形式であって中身ではない。このようなストーリーのなかで、生活環境に対する再帰的コントロールの感覚、実際の社会状況における自己の物語を維持する際の困難に対して、安心させるようなバランスを作りだす、一貫した物語の感覚が獲得される」(pp.225-226)。ギデンズは、「物語」をある個人がそのままの生活では味わうことのできない満足を提供する代替物と捉えており、その意味では「物語消費」の議論に近い。ただし、それと同時に「物語」は特に自己物語を編み上げる際のモデル、または自己物語を維持するためのバランス感覚を提供してくれるものとも捉えており、寧ろこちらにより重きが置かれている。ここで注意しなければならないのは、ギデンズは自己を、もっといえばアイデンティティというものを自己物語の連続的構築物として把握している点である。このような前提から「物語」を捉え直すと、それは自己物語に書き込まれ得る言説的資源として位置づくのである³。

このような理解が可能となる学術的背景には、ギデンズの後期近代に対するまなざしがある。彼は、構造と主体とを相関的に捉えることから時代診断を試みようとした。その際、「構造」概念は安定的に供給される規則であると同時に資源としても定義されている。つまり、構造を絶対的な秩序ではなく、変換可能で虚像的なものとして捉えているのである⁴。この視

座を本研究に引き寄せると、メディアなどによって流布される物語をひとつの構造とみることもできよう。対して受け手である人々は、物語を言説的資源として素材としている反面、それ自体の文脈によって規定されてもいる。このような営みを、上野（2005）は言説実践における「引用」（citation）と呼んでいる。そして、それが単なる反復ではなく、その都度「異本」（version）を生産すると指摘し、この意味で再生産は差異生産でもあり、引用と再生産との往来のうちに社会変革へと繋がる攪乱の契機を見出している。ここで再び、自己が自己物語の連続的構築物であることを踏まえるならば、言説実践を通して編み上げられるアイデンティティが、流動的で多元性を帯びたものになることが理解できよう。以上のことから、ギデンズにおいて「物語」概念は自己物語、すなわち自己を構築していく際のその時々で参照する資源であり、その言説実践は絶えず再帰的に営まれるものである。彼はこれを、個人が生活史という観点から自らの経験を再解釈・再組織化しつつ構築していく「自己の再帰的プロジェクト」（reflexive project on the self）と呼んでいる。なお、ここまでの議論をまとめたものが図1である。

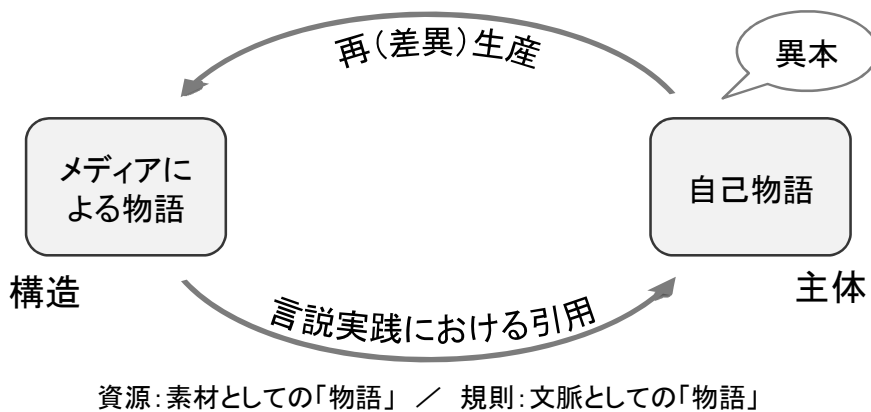


図1 「引用」概念を用いたA, ギデンズの自己物語論への理解

VI. おわりに

本研究は、「物語」を鍵概念とした文献調査から、今後の自己物語論に資する知見や課題を析出することを目指すものであった。その結果として、次の二つの示唆が導き出された。まずは、自己との関わりのなかで「物語」には両義性—自己によって主体的に選択される性格と、反対に自己を規定する性格—があることが認められた。この点についてギデンズの自己物語論を下敷きに理論的に捉え直すと、ともに自己を構築していく言説実践のうちに位置づくものであることが明らかとなった。一方で、この作業からギデンズにおける自己物語論の

新たな可能性が示唆された。すなわち、自己物語が紡がれる過程を力学的に描き出せる点である。これまでの物語論においては、自己と物語の関係性がどこか事後的な定点観測になっているのに対して、ギデンズの自己物語論は分節的な視点をもたず、自己を編み上げていく連続性や循環性それ自体を問題にしているためである。

ただし、そのためには実証的な事例研究による知見の積み重ねが欠かせないであろう。ギデンズの仕事はあくまで時代診断であるが故に、抽象的な議論に留まり具体性に乏しいところがある。また、その際は神話やストーリーなどの「物語」と類する概念についても整理する必要があるだろう。これらの点を今後の課題として提示することで、本稿の結びとする。

【注】

- ¹ 辻 (1999a, 1999b) は、若者言葉の利用と友人関係との関連についての調査を行なっている。ここで辻が着目したのは、90年代以降に登場した若者言葉である。その幾つかは発言の責任を曖昧化するような表現であり、対人関係における拘束力を緩和するように用いられていた。拘束力の緩和は、諸関係の選択的な切り替えを容易にすることから、この選択的な友人関係のあり方を「フリッパー志向」と名付けた。フリッパー志向の若者は、関係に応じて複数の自己をもち、それらの自己を切り替えながら関係をマネージしていくのである。自己の多元性についての具体的な事例ではあるが、本稿ではこれ以上の言及はしない。
- ² 他方、1973～86年生まれで両親ともに戦後世代の子どもたちに関して、次のように述べている。「唯一絶対のものなどないのだから、自分も、自分の生き方も唯一絶対であるはずはなく、自分が好きなようにやれば良いという価値観で育ってきた。だから彼らは自分らしさを所与の自然権として肯定する。しかし、だからこそ彼らは自分らしさの実現が何らかの束縛からの解放という価値であるとは昔ほど感じていないとも考えられるし、逆に、自分らしくすればよいという寛容を、自分らしくあらねばならぬという命令と感じ、それを不快に感じたとしてもおかしくない」(三浦, 2005, p.124)。この「自分らしさ」を構築していく過程を如何に意味づけるかという議論は、市場の物語をどのように導入するかとも関わってくる点で重要であるが、紙面の都合もあり、ここではこれ以上の言及はしない。
- ³ 近代社会学にも大きな示唆を与えたとされる家族療法における物語論的アプローチは、まさにこのような複数の物語の緩やかなまとまりを前提としている。C, E, スルズキー (1992) に従えば、自己の在り方をより苦痛の少ないものへと書き換えるこのアプローチは、セラピストとの会話から、まさに現実だと感じている物事に対して、異なる見方を提示することでそれを再構成していく。
- ⁴ 「構造」概念の可変性を示した A, ギデンズは、このとき「主体」概念を構造に規定されるだけの存在ではなく、寧ろ構造それ自体をも編み上げる積極的な存在として把握している。また、構造はあくまでも「構造特性」を示すだけであり、ある出来事として実際に人々のまえに立ち現れ、認識可能となる「システム」との概念的な峻別をしている。

【引用・参考文献】

- 浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』，勁草書房。
- （2015）『「若者」とは誰か—アイデンティティの30年』，河出ブックス。
- 東浩紀（2001）『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』，講談社現代新書。
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony and Lash, Scott (1994) *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press. (松尾精文ほか訳（1997）『再帰的近代化—近現代における政治，伝統，美的原理—』，而立書房.)
- Carlos, E. Sluzki (1992) *Transformations: A Blueprint for Narrative Changes in Therapy*, Family Process 31.
- 土井隆義（2009）『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』，岩波ブックレット。
- Gergen, J. Kenneth (1999) *An Invitation to Social Construction*, Sage Publications. (東村知子訳（2004）『あなたへの社会構成主義』，ナカニシヤ出版)
- Giddens, Anthony (1990) *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press. (松尾精文・小幡正敏訳（1993）『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結—』，而立書房.)
- （1991）*Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (秋吉美都ほか訳（2005）『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会—』，ハーベスト社.)
- 橋本純一（2002）『現代スポーツメディア論』，世界思想社。
- 平野啓一郎（2012）『私とは何か—「個人」から「分人」へ』，講談社現代新書。
- 片桐雅隆（2011）『自己の発見—社会学史のフロンティア』，世界思想社。
- （2017）『不安定な自己の社会学—個人化のゆくえ』，ミネルヴァ書房。
- Lyotard, Jean-François (1979) *La condition postmoderne*, Paris. (小林康夫訳（1986）『ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム』，水声社.)
- 松田恵示（2009）『交叉する身体と遊び—あいまいさの文化社会学』，世界思想社。
- 三浦展（2005）「消費の物語の喪失とさまよう『自分らしさ』」，上野千鶴子編著『脱アイデンティティ』，勁草書房，pp.103-135.
- 宮島喬（2007）「社会学のアイデンティティ—ブルデューとギデンズの理論的交錯点を通して—」，『応用社会学研究』49，pp.297-305.
- 仁平典宏（2018）「オリンピックボランティアと「物語」の動員—「やりがい搾取」論を問い直す」，奈良女子大学オリンピック公開シンポジウム「オリンピックとスポーツボランティア」講演資料。
- 桜井厚（2018）「たった一人のライフストーリー—自己語りの一貫性と複数性」，小林多寿子・浅野智彦編『自己語りの社会学—ライフストーリー・問題経験・当事者研究』，新曜社。
- 荻上チキ（2008）『ネットいじめ』，PHP新書。
- 大塚英志（1989）『物語消費論—「ビックリマン」の神話学』，ノマド叢書。

- (2004) 『物語消滅論—キャラクター化する「私」イデオロギー化する「物語」』, 角川書店.
- 齋藤環 (2014) 『キャラクター精神分析—マンガ・文学・日本人』, 筑摩書房.
- 辻大介 (1999a) 「若者語と対人関係」, 『東京大学・社会情報研究所紀要』 57.
- (1999b) 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」, 橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』, 北樹出版.
- 内田隆三 (1999) 「現代スポーツの社会性」, 井上俊ら編『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社.
- 上野千鶴子 (1992) 『〈私〉探しゲーム—欲望私民社会論』, ちくま学芸文庫.
- (2005) 『脱アイデンティティ』, 勁草書房.

Self-Narrative Theory in Giddens and Citation

Shuichi Takeuchi

Abstract

The present study aims to provide certain findings and challenges on Self-narrative theory (Self-Narratology) through literature searching with “narrative” as the key concept. The result suggests two following. One is about biface of “narrative”. In other words, there can be recognized narrative as a component for construct a self-narrative and that as a context which defines oneself. Also, it is found that both of narratives originated from “citation” as its trigger.

Another is about new possibility to interpret self-narrative theory in Giddens. He has been argued that continuity and recurrence on forming one’s identity. Therefore, it indicates that the process of self-narrative construction can be captured more dynamically. However, it also requires accumulation of information based on empirical case studies.

Key Word: self-narrative, narrative, citation, reflexive-project on the self